



今日も、みんなで日本一おいしい米づくりに励みます

## 農業は、自然と人の力と心 自分しかできない農業を求めて

米どころ新潟で、無農薬の米づくり、農業の事業化に取り組む平石博さん（新潟県長岡市）。自分しかできない農業の道を、泥んこになりながら問い続けた。その歩みと想いとは？

### 土にかえること

私の実家には、少しばかりの田畑がありました。教師だった父と農家生まれの母は、休日などに農作業をしていました。

明治二十五年生まれの祖母が「畑の草は大丈夫か」と父によく聞いていたこと。稲刈りの時、家族みんなでおにぎりを食べたことなどを覚えていきます。

しかし、私は農作業を一切手伝いませんでした。汚れる、疲れる、恥ずかしい、野菜などはスーパーで買った方が安くて割に合わない…と子ども心に思っていたからです。父母が農作業をしていても、知らんぷりで遊びに出かけていました。

大人になっても農作業をすることはありませんでした。

四年前の夏、久しぶりに会った父が心配そうにぶと言いました。「畑の草が伸びておらんかなあ…」。

八十七歳となった父には、畑仕事はままなりません。実家の兄が時々草刈りをしていました。「仕方ない」と、私は生まれて初めて草刈り機で草刈りをしました。

刈り終わると、畑に座って汗をぬぐいながら休みました。亡くなった母が、麦わら帽子をかぶって畑に座って休んでいたことが思い出されました。

「何か植えるか…。その日から、じゃがいも、人参、大

### 鈴木 中人

根、西瓜、ピーマン、トマト、かぼちゃなどを「素人農夫？」として育てるようになりました。

ある日、帰省した愚息に畑のことを話すと「言いました。『老後の楽しみ、ボケ防止。まあ頑張ってください。』」と言ったことの再現でした。

土に向き合つ中で思うことがあります。

いのちが癒される。土に触れる、においを感じる、土と会話すると気が安らぎ、足が地に着きます。

お天道様は有難い。作物も草も虫も、自然の大法則の中で芽吹き、実り、循環していきます。

一所懸命。一所に足を踏ん張って汗を流し続けること、一生懸命になつていく。

歳のせいでしょうか。最近は、お天道様リズム（早起き早寝）が、いのちのリズムになってきました。

土にかえることは、人間も自然の小さな一部。生かされている自分を体で実感すること。そして、土となる一を自然体で受け入れていくこともかもしれません。

ベランダ栽培でも十分です。スマホに触れる時間を、少し土に触れてみてはいかがでしょうか。

### 大嫌いな農業をやる

一九五九年一月、新潟県長岡市に生まれた。父（信一郎）は、本家の水田を借りて米を作り、冬は杜氏として酒蔵に出稼ぎに出た。小学生になると農作業を手伝った。帰宅すると、広告の裏に「〇〇に來い」と書いたメモがいつもあった。草取り、二五キロの籾殻の袋詰め、薪で風呂焚きもした。

「農業が大嫌いでした。汚れるし重労働。親がサラリーマンの同級生は、家族で海水浴、スキー、ドライブにもいく。自分の家族は一度もありませんでした。同級生の親に連れて行ってもらいました。本当に羨ましかったですね」

母（正江）も祖父も、朝から晩まで働き続けていた。

「なぜ農家は、こんなに働いても動いても貧乏なのか？子ども心にいつも思いました」

農業をやる。高校生のとき決心した。

「母親があまりに可哀そうでした。当時、父は農業関係の役員をして田植えが終わると家にもいない。でも母親は黙々と働いていた。母親を楽にさせたいと…」

「ただ継ぐだけではダメだ。自分

にしかできない農業をやる。儲かる、楽しい農業をするんだ」

将来の農業経営を思い簿記も学び、農業大学を卒業した。

「心の底に二つの思いがありました。俺も農業をやりたいと思う人が出てくる農業にしたい。農業を見下すような周りを人を見返してやりたい。泥んこの野心でしたね」

自分にしかできない農業を拓く道が始まった。

### 志の一粒一心

父は、お金ができると田んぼを買い増してきた。自己所有十反、借地三十反で米作りをしていた。

「当時、八桁農業（年収一千万）であれば生活ができると言われてました。がむしゃらに働きました。でも農業の実際は本当に大変でした。稲の栽培技術、農業機械の運転技術、農業経営の知識。この三つを覚えないと農業は何も出来ないと痛感しました」

新潟大学農学部を卒業した弟も一緒に働きだした。しかし、収入は増えず、冬は兄弟共に出稼ぎに出た。三年後、弟は農業をやめて民間のソフト会社に就職した。